
それぞれの道、繋がる道

アクベンス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それぞれの道、繋がる道

【NZコード】

NZ8394L

【作者名】

アクベンス

【あらすじ】

昔、大好きな人がいた。

その人は私を闇から光へ誘つてくれて、私にとつて無一の親友だった。

その彼女と逢えなくなつて久しく経つが、元気にしているだろうか？
作者の妄想による十六夜咲夜の追憶劇をお楽しみください。

前編（前書き）

昔何処かで聞いた咲夜と蓮子知り合い説を妄想で広げてみました。よつてオリ設定が満載なので、ありえないとは思いますが決してこの小説内の内容を信じない様お願いします。

あと、今作品は前・中・後の3部作を予定しています。
それではどうぞ。

「綺麗な月ね、咲夜」

テラスで紅茶を飲みながら月を眺めていたお嬢様が、隣で控えていた私に向けて呴いた。

「そうですね、綺麗な月ですね」

お嬢様の言葉をそう返しながら、空に浮かぶ用を眺める。

ろうか。

晚夜

私はお嬢様の呼ぶ声に気付いて視線を下に向ける。この間これから嬢様ではなく私を見ていた。

「なんでじょうか？」

「何を考えていたの？」

「……いえ、少し顔を思い出しておきました」

私の言葉にお嬢様はそう、と咳いて俯いてしまいました。

あらすじ回し……見しそうは

私は元々外の世界で生まれ育った。

しかし外の世界と言つても裏社会に生きる家庭で、私の家族は両親に兄が数人という構成であつた。

つたと聞かされたからだつた。

私はその兄弟の中で一番末っ子であり、唯一の女でもあつた。

だからといって何がが変わる話でなく利も兄達と同じく裏社会を生きる為の術を教わったのだが、私は家族から避けられていた。

何故なら私が触れた物の時間が止まる事があつたからだ。

当時の私にはその能力の制御など出来るはずもなく、時折部屋とい

う空間の時間を止めてしまつたりしていた。

その為家族には危険視され、距離を置かれるようになつた。

……まあ、避けられていたのはそれだけではなかつたのだが。

とにかくそんな環境で育つた私は、義務教育で通つていた学校でも友達など出来ることも作ることもしなかつた。

クラスメートに陰口を言われてもいじめを受けても無視。そうしていつしか誰も私に関わろうとしなくなつた、教師でさえも。

しかし、そんな私が中学に入った頃に転機が訪れた。

それは中学に入つて一週間が経つた頃だつたか、私が一人で給食を食べていた時の事だつた。

「あのわ」

誰かが誰かを呼ぶ声がしたが、それを私は自分に向けられた物ではないと決めつけていた。

なので私は視線を下へ向けたまま黙々と食べ続ける。

「あの～聞こえてる？」

再び呼ぶ声。しかもわざとより自分の近くで聞こえてきた。

私は「こ～でようやく」の声が自分に向けられているのでは?と思つた。

そう思つたので頭を上げると、そこには私に微笑みかける一人の少女が立つていた。

およそ私のような暗い女とは縁のなさそうなその少女こそが、私の始まりだつた。

濃い茶色の髪と整つた顔立ちがその笑顔を際だたせ、私に衝撃を与えていた。

人つてこんなに綺麗に笑えるのか、と。

「やっぱり可愛いじやん! よし、決まり! 今日からあんたとは友達！」

そんな人として少しおかしな衝撃を受けていた私に追い打ちの如き発言をしてきた。

……可愛い?

誰が？

私が？

友達？

彼女と私が？

何で？

判らない。

私の頭の中は突然の事に混乱を起し、まるで目が回ったように頭がふわりとなつて横へと傾く感覚へと変化していった。

あ……まずい。

これは倒れたな。

何故かそれだけは判り、私は頭部への強い痛みと共に意識を失つたのだった。

「ん……」

私が次に目を開けると、目の前には白い壁……天井？が広がつていた。

「あ、起きた！先生、起きましたよ～！」

女の子の声が聞こえたのでそちらを向くと、そこには私の意識を一気に覚醒させる存在があつた。

「あ、貴女は！？うつ……痛つ……！」

上半身だけ起こし、彼女に声をかけようとしたり、右側頭部辺りに鋭い痛みが奔つた。

「え？あ……だ、駄目だよ寝てなきゃー頭を強く打つたんだからさ！」

私が痛みに耐えきれず再び横になると、すぐに白衣を纏つた女性が現れ氷水をタオル越しに痛む場所へ置いてくれた。

「倒れた際に隣の席の椅子の角に当たつたそうよ。保護者を呼んで病院に行かせるからそれまでそれで我慢してちょうだいね」

私がはい、と短く答えると女性は電話をするからと言つて部屋から出て行つた。

そこまで経つてようやく「こじが保健室である」と認識した。

「えっとさ……ごめんね」

傍らで椅子に座っている状態の彼女が突然謝ってきた。

「私がびっくりさせたから倒れちゃったんだよね？だから『ごめん』確かにびっくりしたのは確かだが、あれは私が勝手に混乱したからであつて彼女は悪くない。

謝るのは筋違いというものだ。

「そんなことないわ。あれは……私の過失だから」

同年代との会話というものに慣れていない私は少し緊張しながらも何とか言いたい事を伝えることが出来た。

しかし、彼女は焦ったように首を横に大きく振つて

「そんなことあるの！私が急に話しかけたりしなかつたら倒れたりなんかしなかつたでしょ？だから私が悪いの。判つた？」

言いたいことは理解出来たけど、何故それを自ら言い出すのだろうか？

黙つていれば私の過失で済むのに。

「あ～何かなその不満そうな顔は？」

え……顔に出ていただろ？

これでも裏に手を染める者としてポーカーフェイスには多少自信がある。

いや、さつきから怪しくはあるけど。

「顔に……出てたかしら？」

機嫌を伺いながら尋ねる。

忘れかけていたが、相手を不愉快にさせるのは仕事上有つてはならないことなのだ。

仕事中でないにしろそれは同じ。

「ううん、ほんとは顔には出てなかつたよ。まあ、少し大きく目を開いてたりはしてたけどね。逆に顔に出てないから不機嫌そうに見えただけ」

「……そう

なんというか、とても不思議な子。

明朗闊達でありながら思慮深い印象を与えるなんて。
しかもこんな私に、いきなり友達になつてだの……あ。

「あ、あの……」

「へ？ あ、何？」

「その、さつきの友達つて……」

私がそこまで言うと不思議そうな顔で聞いていた彼女がにこつと笑
いかけてくる。

「うん、今日から私達は友達ね。あ、そういうやまだ名前言つてなか
つた。私は宇佐見蓮子。よろしくね」

宇佐見蓮子と名乗つた少女を見る。

友達……この子と、友達。

「……いいの？」

自分で驚いた。

気付いたらそろう言葉にしていたからだ。

「いいも何もあんたみたいな可愛い子となら大歓迎だよ。ね？ だか
ら友達になろう」

優しい微笑み。

こんな優しさに今まで触れたことがない。

いいのだろうか。

こんな夢の様なことを素直に受け入れて。

……いや、良くない。

私は裏の人間。

私に関わればこの少女は不幸になる。

だから、駄目。

「駄目よ」

「え？」

「私は……貴女を不幸にするから」

これでいい。

凄く、本当に凄く魅力的ではあるけど、彼女の為だから……正しい

はずだ。

「私が不幸になるから友達になれないって？」

「そうよ」

「なんであんたにそう決めつけられなきゃいけないの？不幸かどうかなんてあんたの基準で決まるものじゃないわ、私が決めるの。だから私と友達になれるの。判つた？」

私は唖然としていた。

彼女が不幸になるのは必然であると確信しているからこそ言ったのに、自分で決めると跳ね返された。

なんて自分勝手な子なのだろう。

私は今まで感じたことのない何かを、知らぬが故に抑えきれなかつた。

それが私の、人生最初の怒りといつものだった。

「貴女は……」

「えっ？」

私の急な態度の変化に驚いたらしく、彼女はポカンとしているが私は気にすることなく続ける。

「貴女はなんて自分勝手な人間なの！私は貴女を思つて言つてるのに、この分からず屋！」

私は流れるように言葉をぶつけると彼女も流石にカチンときたのか、顔を真つ赤にして反論してきた。

「何よそれ！漫画か何かみたいなこと言つてるあんたにだけは言われたくないわね！この意氣地無し！」

私は寝ているのに耐えられず起き上がつたが、その際に頭痛と頭にあつた氷水をベッドに落としてしまつ。が、気にすることなく狂つたように叫んでいた。

「漫画が何かだつて？ふざけないで！現実に目を向けてないのはそつちじやない！温い表の世界で生きてきた温室育ち風情が意氣地無し呼ばわりしないで！」

「え？」

「あつ……」

言つてから気付いた。

今、私は自分の素性をバラすような言い方をしてしまつた。体全身が急激に冷えていくのがわかる。嫌な汗が止まらない。どんな理由であれ他人に話すのはタブー。

言つた場合は……相手を殺すしかない。

「まさかあんた……」

「それ以上言えれば……死ぬことになるわ」

私は取り出した折り畳み式のナイフを彼女の首筋に突きつける。私とて殺したくはない。

そもそも私はまだ人を『殺したことがない』のだ。

「そつか、だからなんだ」

何かを突きつけられているのは判つているはずだが、それにしてはやけに落ち着いていた。

「何が……だからのかしら?」

一応仕事モードに入った私は冷静かつ、はつきりとした口調で尋ねた。

「ううん、大したことじやないんだけどね。あんたは他の人より辛くて暗くて寂しい場所を知つてゐるから、そんなに優しいんだなって思つただけ」

また、頭が混乱し始める。

優しい?……私が?

「何を……馬鹿な」

私の言葉に耳を貸さず、一人納得した様子の彼女は「うん、やっぱりあんたとはい友達になれそう」と言つてきた。

今日何度も聞いたその友達という言葉を聞いて、私は何故かナイフを向けるのを止めた。

そしてそれは私の中で積み上げてきた何かが崩された瞬間でもあつた。

だから一言、私はこう呟いた。

「私の完敗よ」

それはつまり、私の友達宣言だった。

前編（後書き）

前編終了です。

正直少し咲夜の地の文が男口調臭い気もしますが、如何でしたでしょうか？

次回は友人となつた2人の楽しい日々を書けたらと思います。

ちなみにこれは1年くらい前に思いついて書いた物で、一度この先もある程度書いたのですが現在停滞しています。

よつて次回更新は未定ですが、再びこれを読み返して少し思いついたのでもしかしたら近い内に更新するかもです。

それではまた次回、或いはネギまの方でお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8394/>

それぞれの道、繋がる道

2010年10月11日05時43分発行